

本文比較による『源氏物語』教材化の可能性

—「若紫」巻を用いて—

教育デザインコース 国語領域
安野 葵

はじめに

高等学校の古典教育で多く扱われる物語作品には、『伊勢物語』・『源氏物語』・『平家物語』などが挙げられよう。その中でも『源氏物語』は、長年にわたって教科書に採録され続けており、2013・2014年検定済教科書「古典B」古文編全19点すべてに採録されている⁽¹⁾。中学校の教科書や「国語総合」での採録は無いため、高等学校第2学年以上で初めて扱う作品と言える。さらに「桐壺」(冒頭の光源氏誕生)と「若紫」(小柴垣の垣間見)の二巻が採録率100%であることから、授業で扱われる機会は非常に多いと考えられる。

『伊勢物語』と『平家物語』についても19点すべてに採録されているが、『源氏物語』のように採録率100%の段や巻は見られない。また、『平家物語』は中学校でよく扱われるため、高等学校での教科書採録率が高いとはいえ、必ずしも授業で取り上げられるとは限らないであろう。

高等学校2年生以上の定番古文教材として確固たる地位を確立している『源氏物語』であるが、現場で扱う際には、文法事項だけでなく、登場人物の相関関係、当時の官位制度、衣装や住居などに関する知識を押さえるために、生徒が物語内容を深く読み味わうといった時間を持つことが難しいと考えられる。また、作品自体が長編であり、その構成の複雑さや他作品との関連性、登場人物の多さや主語の省略など多くの特色を持ち、教員自身が難しさを感じる古典教材の筆頭とも言えるであろう。

本稿では、高等学校古典教育の課題を踏まえ、定番教材である『源氏物語』に関して新たな試みが出来ないか考え、異本を用いた本文比較の授業提案を行う。

1、高等学校古典教育の課題

2005年度、国立教育政策研究所が高等学校第3学年を対象に実施した「教育課程実施状況調査⁽²⁾」において、「古文は好きだ」の質問事項に対しては、「そう思う8.5%」・「どちらかといえばそう思う14.6%」、「どちらかといえ

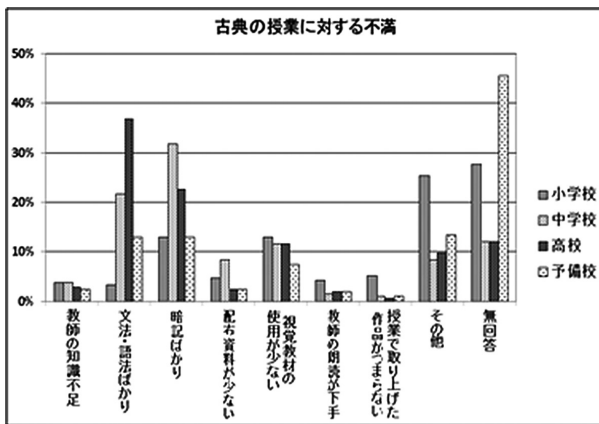
ばそう思わない21.5%」・「そう思わない51.2%」という結果が示された。「漢文は好きだ」に対する回答も概ね同じ割合であり、高等学校において古典嫌いの生徒は7割を超えている。

その後全国的な調査は行われていないものの、2013年に大元理絵が都内公立高等学校2年生に向けて行った高校生の古典に対する意識調査⁽³⁾では、「古文が好きだ23.6%」「漢文が好きだ19.9%」という結果が得られ、古典への学習意欲の向上について未だ改善は見られていない現状が窺える。

では、古典に苦手意識を持つ生徒達はどのような授業を求めているのであろうか。大元の同調査において、「どのような授業をのぞむか」という問いの自由記述欄には、「語句や文法だけでなく、内容や人物の思想について、深く考えたり想像したりする授業」・「人生において必要なことや、自分のいろいろなものに対する考え方を広げてくれるような授業」・「日常でも使えるような、興味をそそる授業」・「生徒がもっと参加できる授業」・「視覚からも情報が入る授業」といった回答が中心に挙げられ、古典の授業の課題点が浮き彫りになった。

中央教育審議会が2016年8月に発表した「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ⁽⁴⁾」の中でも、高等学校国語科に関して「教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向」があることや、古典学習に関して「日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」ことなどが課題として指摘されている。

さらに、2015年度本学教育人間科学部学校教育課程において、1年次生必修科目である「小教専国語」の受講生218名を対象に実施したアンケート調査⁽⁵⁾では、「小学校、中学校、高等学校、予備校のそれぞれで受けた古典の授業に対する不満」に関して、以下のような回答を得た。



高等学校では、特に「文法・語法ばかり（37%）」「暗記ばかり（22%）」の授業に不満を感じていることがわかる。文法・語法に偏重し、暗記などが中心となる授業形態は、入試対策に起因するものと考えられるが、そればかりに終始することは、生徒の古典への興味・関心の低下を招き古典嫌いを生み出す大きな原因として、昨今課題になっている。

また、「今後古典の授業を自信を持って行うために、開催してほしい講座や支援してほしい内容」についての自由記述では、「著名な古典作品の概要、世界観、時代背景や作品成立の背景などの知識を得たい」・「文法の復習、丸暗記ではなく覚える方法を知りたい」・「古典を面白いと感じ、好きになれるような講座を受けたい」・「内容を楽しみながら、様々な作品に触れたい」などが挙げられた。将来教員を志望する学生の実態として、高等学校までの教育の中で、古典作品に広く深く接したり、楽しんだりする機会を持っていないことがわかる。このような状態のまま教員となることが、自身の経験した文法・語法などが中心の授業を現場で再現してしまうことにつながり、長年にわたって古典教育の課題に大きな進展が見られない要因の一つとなっていると考えられる。

2、先行実践

近年の高等学校古典の授業・教材の工夫としては、物語の続きや脚本の創作、劇化、補助教材としての漫画等メディアの利用、挿絵の活用、他作品や現代語訳の比較読みなど様々な取組みが見られる。

ここ数年の実践をいくつか紹介すると、木村（2010）⁽⁶⁾が、『伊勢物語』・『土佐日記』の一場面を絵巻に、『万葉集』などの和歌を色紙絵にする授業を行い、絵画化の活動により「生徒たちが物語の世界をイメージしようと

努力し、これまであまり気にとめていなかった細かい言葉などにも注意を払って読むようになった」との成果を得ている。また、阪本（2010）⁽⁷⁾は、挿絵を活用した『源氏物語』の授業実践を行い、挿絵を用いる利点として『『原文』に触れる』こと、「ストーリーとともに視覚的に古典常識を学ぶ」ことの2点を挙げている。絵を描くことや見ることが、生徒の作品理解や読解、学習意欲の向上につながるようである。

杉木（2012）⁽⁸⁾は、古文・漫画・小説・現代語訳を用いて『源氏物語』を読み比べる実践を行い、石原（2011）⁽⁹⁾は現代語訳を7種（与謝野晶子、谷崎潤一郎など7名の訳者）用いる実践を行っている。「同じ題材を取り上げた文章や同じ時代の文章などを読み比べ、共通点や相違点などについて説明すること」は、現行の学習指導要領の「古典B」における言語活動例として示されているが、実践を終えて石原は、「読み比べの結果をふまえて原文にどう引き戻していくか課題」であるとしている⁽¹⁰⁾。

本稿の研究課題である異本を用いた取り組みとしては、斎藤（2004）⁽¹¹⁾が『源氏物語』「初音」巻冒頭の異同について取りあげ、「揺れている本文の世界に触れさせることは、錆び付いて硬直していると思われがちな古文のイメージを変え、生動しているものとして、本文を広い視野でみることを促す」との考えを示している。生徒に異同箇所を比較検討させたという報告は無く、あくまで「教科書に書かれた本文は、一字も揺るがない決定的なものではない」「教科書の本文と違う本文もある」という認識を持たせるための説明・紹介にとどめているようである。

実際に生徒が本文比較を行う取組みには、宗京（2012）⁽¹²⁾の『平家物語』を扱って「覚一本」「百二十句本」「延慶本」「源平盛衰記」を比較読みする実践がある。異本の考察を通して生徒が主体的に古文を読むことに主眼を置き、「史実の記録としての要素が強い『読み本系』の他の異本よりも、平曲として語られる『語り本』の異本のほうが、話は美化され、『物語』は聞き手の望む方へ発展していく、ということが考察される」というように、書き手の意図によってそれぞれ展開や与える情報が異なることに気づかせたり、文章の特色を捉えさせたりする授業であり、語句の差異を取り上げ、その効果について比較・考察を行うものではない。

3、異本を用いた本文比較の学習

ここでいう「本文比較」とは、異本を用いて『源氏物語』の原文同士を比較することであり、他作品や現代語訳と比較することではない。大島本を底本とする教科書とは別のテキストとして河内本を併せて用いることで、語句の差異に着目し、描写の違いを捉えさせる学習を想定している。

大島本と河内本の概要については、次のように簡単にまとめた。

大島本

藤原定家が校訂した青表紙本系統の本文をもつ写本。大島雅太郎旧蔵。昭和初期にほぼ全巻揃った状態で発見され、現存する中の最善本とされている。

(現在の校訂本はそのほとんどが大島本を底本としており、2013・2014年検定済教科書「古典B」における『源氏物語』「若紫」本文も、19点すべてがこれに拠っている。)

河内本

鎌倉時代、河内守である源光行・親行父子が当時伝わる写本を集め、校合の上解釈を加えた。意味が通りやすいよう、本文に積極的に手加えられている。室町時代初期にかけて重んじられ、鎌倉時代の学術的著作の多くが河内本に拠っている。また、江戸時代に最も流布した『湖月抄』などの板本は、青表紙本系統でありながら、その本文は河内本の影響を大きく受けているとされる。

異本の選定については、広く流布した歴史と前述した影響力、校本にも用いられた信頼性や入手しやすい点も含め、河内本の使用が適切であると考えた⁽¹³⁾。

『源氏物語』本文としてどちらかが正しいというわけではなく、それぞれに特色と差異があり、それを比較することで教科書本文(大島本)を読むだけでは気づくことの無かった情報を浮き彫りにすることができる。

また、異本を教材に用いることによって、以下のような学習が実現できると考える。

- ・生徒が物語享受の歴史を知る機会を得て、古典作品そのものに関心を持つ
- ・原文同士を比較することで、古文の表現の豊かさに触れ、古文を読む能力を育む

【本文比較によって想定される学習効果】

本文比較の学習によって身につけたい力、めざす生徒の姿をまとめると、以下の4点である。

- a. 物語享受の歴史を知ること、古典作品に興味関心を持つ
- b. 語句のもたらす効果を実感することで、語句や語法を学ぶ目的意識を持つ
- c. 語句の差異に着目し描写の違いを考察することで、言語感覚を磨き、分析的な読みを身につける
- d. 登場人物の心情や書き手の意図に考えを広げること、作品理解を深め、多様な解釈の可能性を知る

c・dに関しては、2009年3月に告示された「高等学校学習指導要領『国語』「古典B」の指導事項ア「古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること」と、エ「古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること」に対応する。

「高等学校学習指導要領解説国語編」では、アに関して「特に、文章を読む中で、文脈に即して意味や用法を習得させる指導や、書き手の意図や文章中の人物の心情などを、語句を手掛かりに場面や状況の展開からの確に読み取り、作品の理解につなげていく指導を工夫することが大切である」とし、エに関して「古典には、書き手や文章中の人物の思想や感情が、それにふさわしい言葉で表現されて」いることを踏まえ、前半の「古典の内容や表現の特色を理解して読み味わう」ことは、「その文章の修辞・文体など表現の仕方の特色をとらえ、思想や感情などがどのように表現されているかを理解し、巧みな描写、繊細な表現、簡潔な語調などを味わう」こととしている。また、「『読み比べ』することで、生徒は、文章を課題意識をもって主体的に読むことができる」とされる。

本文比較を行い、語句の差異に着目することで、人物の心情や視点の定め方を明らかにすることができ、場面の状況を踏まえて語句のもたらす効果を考察することにより、物語内容への理解が深まったり、小さな差異であっても大きな描写の違いにつながるという実感を持たせたりすることができる。また、このような学習を行う中では、分析的に文章を読む能力も養うことができるであろう。以上のことは、「古典B」の目標である「古典としての古文と漢文を読む能力を養う」ことや、国語科の目標である「言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め」ることにも直結すると考える

4、教材の選定

異本を用いて本文比較を行う上で、「若紫」は本文の異同箇所が多いという理由だけでなく、光源氏が垣間見によって生涯の伴侶となる若紫（紫の上）を見出す場面であり、長編物語が展開していく上でも重要な箇所である。さらに、王朝物語に特徴的な「垣間見」を踏まえながら、源氏が「何をどのように見ているか」ということを読み取ることができ、その心情に迫ったり、作者の表現の意図を捉えたりすることができる。

【比較箇所の特徴】

「若紫」本文の比較箇所選定のポイントとしては、以下4点に留意した。

- ・一文の中に複数の差異がある
- ・語句の差異によって描写に違いが出る
- ・比較、考察する中で解釈に違いが出る
- ・文法や語法の難易度が高すぎない

以上を踏まえ、次の2箇所を取りあげた。

I 「惟光を供に垣間見する源氏」

(大島本) 人びとは返し給ひて、惟光の朝臣とのぞき給へば、…

(河内本) 人びとはみな返し給ひて、惟光ばかり御ともにてのぞき給へば、…

II 「若紫登場（源氏から見た若紫）」

(大島本) 中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなれたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、うつくしげなるかたちなり。

(河内本) 中に、白き衣、山吹などのなれたる着て、走り来たる女子、十ばかりにやあらむと見えて、いみじく生ひ先見え、うつくしきかたちなり。

I の場面の異同箇所は次の2点である。

- ①独自本文：大島本「の朝臣」、河内本「みな」「ばかり」「御とも」
- ②助詞：大島本「と」、河内本「にて」

①では、大島本に「…の朝臣」が入ることによって、惟光の身分を明らかにしている。また、河内本に「みな(副詞)」「ばかり(副助詞)」「御とも」が入ることにより、「惟光一人だけが従者に選ばれた」ことが強調され、惟光が源氏にとって特別な家臣であることを表現しており、親密な関係を読み取ることが出来るであろう。状況をより詳しくしたり、強調したりする効果はあるが、場面の描写として大きな違いはない箇所である。

②では、格助詞「と」と「にて」の違いにより、大島本では源氏が「惟光と一緒に」垣間見している描写である一方、河内本は源氏が「惟光をお供として」一人で垣間見する描写であることが明らかとなる。助詞の小さな違いによって、描写が大きく異なることを実感できる箇所である。

以上 I の場面では、比較考察によって登場人物の関係性をより明確にしたり、垣間見する源氏の描写の違いを視覚的(絵画的)に把握したりすることができる。

続いて II の場面の異同箇所は以下3点である。(※大島本の点線部「て」については、描写等に違いが出ないため、考察の対象として想定していない。)

- (1) 独自本文：大島本「あまた見えつる子どもに似るべうもあらず」
- (2) 語順：「十ばかりにやあらむと見えて」が大島本では先、河内本では後
- (3) 接尾語：大島本「うつくしげなる」、河内本「うつくしき」

(1) では、若紫の登場に際し、他の子どもとの比較から、その特別な存在感を印象付けられる。

(2) は、源氏がどのような順番で何を見たか、というような視点の動きの違いを捉えることができる。さらに、年齢の推察が先に記される大島本は、源氏から若紫の距離が比較的初めから近く、後に記される河内本では若紫が走ってきて、段々と距離が近づき年齢が推察できたと捉えることも可能である。このように語順に着目することで、登場人物の視点を通して内容を捉えたり、描写を映像的に捉えたりすることが可能となる。

(3) は、大島本の接尾語「げ」⁽¹⁴⁾によって「～らしく見える」というように、「源氏が垣間見によって若紫をどのように見ているか」という点が印象付けられる。また、断言を避けるようなニュアンスを伴うことから、垣間見の状況(視界が良好でないことや、若紫と距離があることなど)を想像することもできるであろう。

さらに、直前の「いみじく生ひ先見え（て）」と併せて考えると、「うつくしげ」とする大島本では、若紫の成長後の様子が思い浮かばれることに比重が置かれ、「うつくしき」とする河内本では現在の可愛らしい様子に比重が置かれていると捉えることができる。

以上Ⅱでは、物語における若紫の初登場場面として、若紫という人物がどのように描写され、源氏がそれをどのように見ているかという点が、比較考察によって立体的になる。

5、授業実践

実践は2017年2月、教育インターンとして1コマ完結の同内容の授業を3クラスに向けて行った。教育インターンとは、本学教育学研究科の必修科目であり、学生が教育実践・研究の課題を持って現場に赴き、大学教員の指導ならびに学校や協力機関の支援の下、実習及び調査を行うものである。

【概要】

対象：

神奈川県立K高等学校第2学年3クラス（計101名）

実施日：

実践A 2月9日5校時（A組35名）

実践B 2月9日6校時（B組31名）

実践C 2月10日5校時（C組35名）

教科・教材：

古典B『源氏物語』「若紫」

（東京書籍『精選古典B 古文編』使用）

配当時間：

各クラス1単位時間（45分）

目標：

- ・物語享受の歴史に関心を持つ
- ・語句や語順の差異に着目し、その効果や描写の違いを捉える

対象校は、神奈川県が平成30年度に指定する「新たな学力向上進学重点校」のエントリー校である。対象クラスでは、古文の授業においても日頃からグループワーク等の活動が取り入れられており、無理なく話し合い活動を取り入れることが可能であった。実践のタイミングは、『源氏物語』「桐壺」「若紫」の学習直後であるため、一文（教科書本文）のみでは気にとめることのなかった語句・表現の持つ効果に気づかせることに主眼を置いた。

【授業展開（45分）】

導入：『源氏物語』享受の歴史と本文比較の目的を知る（10分）

- ・『源氏物語』の伝承性について説明、画像資料として写本を提示
- ・本時の目標の提示（「差異のある本文を比較し、考察することで言語感覚を磨く」）

展開：大島本と河内本を比較し、語句の差異によって生じる描写の違いを捉える（30分）

- ・本文比較の練習
 - I 「惟光を共に垣間見する源氏」
 - ・グループワーク（4人）と意見共有
 - II 「源氏から見た若紫」

まとめ：振り返りと感想記入（5分）

導入では、『源氏物語』に作者の自筆本が残っていないことや、物語は書き写すことで伝えられてきたことなどを中心に説明を行った。さらに、視覚的理解を促すために写本⁽¹⁵⁾を提示している。

異本を用いた本文比較は、生徒にとって初めての学習であるため、まずはI「惟光を共に垣間見する源氏」を実践者の説明中心に扱い、本文比較の方法を押さえた上でグループワークに移行し、II「若紫登場（源氏から見た若紫）」を扱った。

本文比較の方法については、ワークシートに大島本と河内本を並べて印字して配布し、次のような指示を出した。

- (1) 本文の違いを探して印をつける
 - ・どちらかにしかない語句：□で囲む
 - ・異なる語句：傍線を引く
 - ・語順の違い：矢印

- (2) 必要に応じて辞書で語句の意味を調べる

- (3) 本文を比較し、描写の違いについて考察する

比較・考察の際には、自分の考えを説明したり、他者の意見から新たな観点を取り入れたりすることができるよう4人班をつかって話し合いをさせ、最後に全体での共有の時間を設けている。

【本文比較の流れと生徒の考察】

〔I 「惟光を共に垣間見する源氏」（練習）〕

①独自本文（大島本「の朝臣」、河内本「みな」「ばか

り」「御とも」)

②助詞(大島本「と」/河内本「にて」)(生徒の話し合い活動)

①については、「4、教材の選定」【比較箇所の特徴】で述べた内容を生徒に伝えている。②では、「と」「にて」の違いに注目させ、「源氏と惟光の描写がどのように違うか」と発問し、生徒同士で話し合う時間を持った。何もヒントは与えず、この発問のみで「大島本では2人で一緒に垣間見をしていて、河内本では源氏1人で見ている」と気づく生徒が各クラス数名いた。これについて全体で共有した後、さらに視覚的理解を深めるため、「源氏が1人で垣間見し、惟光が傍で控える」構図の教科書挿絵『源氏物語画帖』⁽¹⁶⁾と、「源氏と惟光が2人で垣間見する」構図の絵画資料として『源氏物語絵巻』⁽¹⁷⁾を提示した。

実践で用いた絵画は、所有権の問題から本稿には掲載を控えるが、本実践の使用教科書の他に『源氏物語画帖』を掲載する「古典B」の教科書を注(16)に挙げている。また、『源氏物語絵巻』は注(17)に示した『源氏物語千年のかがやき』を参照されたい。

教科書については、大島本を底本としているにもかかわらず、先述した通りその挿絵は「源氏が1人で垣間見し、惟光がそばで控える」構図となっており、矛盾が見られる。一方で資料として提示するために、「2人で垣間見する」構図の絵画を調査したところ、確認できたのは『源氏物語絵巻』のみであり、その成立年代は定型化以前のものであることや、構図等の拙さからも源氏物語絵としては特殊であると言える。

このことから、教科書挿絵は定型化が進んだ後の著名な絵画であり、生徒が興味を持ちやすいよう見た目にも鮮やかものを採択していると考えられるが、本文に即していない点はやはり問題である。授業内では、本文と挿絵の矛盾について押さえつつ、生徒に物語絵には定型があることを伝え、「教科書では著名なものを選び載せているのであろう」という説明にとどめた。

練習で扱ったIを通しては、比較考察によって登場人物の関係性がより明確になったり、描写を視覚的に把握できたりすることを確認し、次の「源氏から見た若紫の様子」の場面を扱ったグループワークに移行した。

〔II「若紫登場(源氏から見た若紫)」(グループワーク)〕

(1) 独自本文(大島本「あまた見えつる子どもに似るべうもあらず」)

多くの生徒が「若紫の可愛らしさの強調、特別な存在感」を捉えることができており、具体性を持った考察としては以下が挙げられる。

ア. 女子が他の子どもと比べて格段に美しいことを表している。

イ. 「女子」がとびきりかわいいという光源氏の気持ちを示す。

イのように、垣間見の視点人物である「源氏の気持ち」として言及できた生徒も見られた。

(2) 語順(「十ばかりにやあらむと見えて」が大島本では先、河内本では後)

この箇所については、以下のウ・エのように「若紫の年齢(幼さ)又は服装の強調」「源氏の視点(どのような順で認識したか/まず何に注目したのか)」という考察が多かった。

ウ. 大島本は、その女子がまだ子供であることを強調。

エ. 光源氏が認識した順に並べている。

このため、机間指導の際に「初めに年齢が予想できた場合と、走ってきた後から予想出来た場合では、何が違うのか」といった発問をしたところ、「大島本では年齢がわかるくらい初めから近くについて、河内本では走って近づいてきたから年齢がわかった」というように、源氏から若紫までの距離の違いについて思い至る生徒も見られた。

(3) 接尾語(大島本「うつくしげなる」/河内本「うつくしき」)

接尾語「げ」によって、垣間見場面の特色が表現される箇所であるが、多くの生徒は「意味も同じだし、違いがわからない」といった状況であった。このため、「げ」について着目するよう促すと、以下のオ・カのように考察できた生徒が見られた。

オ. 大島本の「げ」があることでぼんやりしていることが表現されていて、河内本ははっきり言っている。

カ. 「げなる」で垣間見から想像する感じを出すか「うつくしき」で本当に美しい!と強調するかの違い。

一方、電子辞書を用いて「うつくしげ」を調べた生徒の多くは、以下キのような考察をする傾向にあった。

キ. 「うつくしげ」の方が可愛らしさを強調している。

電子辞書に「いかにも可愛らしい様子である」と記載がある⁽¹⁸⁾ことから、強調表現と捉えているのである。

実践の中ではこのような生徒に対して、「現代で『げ』を使うときはどんな時か」といった声掛けや、「最近使われる『よさげ』という言葉は『よい』とどう違うのか」といった発問を通して現代の自分たちの言語感覚に照らし合わせて考えるよう促した。「よさげ」と「よい」の違いについては生徒の反応も大きく、「『よさそう』とか、『それっぽい』ときに使う」などと、自分たちの経験にひきつけて違いを考えたり、感じ取ったりすることができていた。

【生徒の感想】

生徒の感想を、その記述内容から次の i～v に大別した。それぞれで具体性のあるものや、ほかの生徒とは異なる視点がみられるような感想については、いくつか引用している。

i 語句の差異がもたらす効果 計 56 名 (55%)
(A 組: 29 名 / B 組: 12 名 / C 組: 15 名)

…小さな語句の差異でも、文章の意味が変わることに対する驚きや関心

ク. 細かな違いが表現や伝え方にだいぶ関わってく
ることを知ってすごいと思う。

ケ. 大島本は光源氏の主観が入っているように感じ
て読みやすいが、河内本は起きたことを淡々と述
べているように感じ、つまらないと思った。

「一文(教科書本文)のみでは気にとめることのなかった語句・表現の持つ効果に気づかせること」が本実践のねらいの一つであったため、このような感想が一番多く見られたのは一つの成果である。さらに、ケのように文章の意味が変わることを実感した上で、それぞれの本文の特色に気づき、自分なりに評価をした生徒も 1 名見ることが出来た。大島本と河内本の本文の特色については、授業内で詳しく触れていないにもかかわらず、今回の本文比較を通してこの生徒は河内本の解釈的な態度を感じ取ることができたのである。

ii 『源氏物語』の伝承性 計 36 名 (36%)
(A 組: 10 名 / B 組: 5 名 / C 組: 21 名)

…一つの物語にいくつもの本文が残っていることへの驚き、差異の多さや異文が生じる過程への関心

コ. 源氏物語の本文に違いがあると思わなかったの
で面白かった。

サ. 同じ歴史書籍でも原本が残っているとは限らな
いことに改めて気づいた。時代は変わっても同じ

日本で日本語で書かれた文章なので文化をもっと大切にしようと思った。

多くの生徒は異本の存在自体を知らないため、『源氏物語』に複数の本文があることに驚きや面白さを感じている。また、サのように古典作品の伝承性に触れ、古典を尊重する意識を見ることも出来た。現代を生きる生徒と、古典作品との間には長い時間を経て言語や文化の面で大きな隔たりがあり、これらによって古典への苦手意識が生まれると考える。1000 年前に成立した物語を生徒にいきなり提示するのではなく、その伝承性について実感する機会を設けることで、隔たりを少しでも軽減させることができるのではないだろうか。

iii 物語の読み方 計 2 名 (2%)
(A 組: 0 名 / B 組: 2 名 / C 組: 0 名)

シ. 差違があることで読者にさまざまな読み方があ
ってとても奥深いと感じた。

ス. 新しい物語の捉え方を知れました。

iv 授業方法・題材 計 34 名 (34%)
(A 組: 8 名 / B 組: 12 名 / C 組: 14 名)

…同一作品の同一場面を原文で比べ、自分で違いを考
えて読む目新しさ、面白さ

セ. いつも古文はただながめて現代語訳をとってお
わりだったが、こういうよみかたをすることで奥
深さがわかった。

ソ. 単語帳や文法の本とかにのっていない、自分で
考えて違いを見つけるのは難しかったけど、新鮮
だった。

タ. ただ教科書を読むだけではなんとも思わなかつ
たことに気づけてよかった。

まず、教育インターンの学生による普段とは異なった単発の授業であるがために、授業に関しての好意的な感想が多く見られるということは念頭に置かなければならない。しかし、セ～タの記述から、受動的に物語本文を読んでいた生徒に対し、本文比較を通して、自分の頭で「考え」「気づき」「わかる」ような学習の場を設けることができたと言えるのではないだろうか。

v その他(空欄・否定的感想など) 計 4 名 (4%)
(A 組: 2 名 / B 組: 2 名 / C 組: 0 名)

ン. あまり興味が持てなかった。パワーポイントが
見にくい。

否定的感想については、ンを含めた 2 名のみで、ど
ちらにも共通するのは「パワーポイントの見にくさ」で

あった。それぞれ1日目の実践A・Bの生徒であり、これを踏まえて2日目の実践Cではパワーポイントの改善を図っている。

【成果】

本実践における一番の成果は、生徒が「原文で自ら考えたり感じたりする」姿を実現できたことである。おそらく普段は、辞書に載っている現代語訳等を組み立て、表面的に作品内容を把握していた生徒が、異本を使ってその語句の差異を比べてみるだけで、自然と原文の物語世界に踏み込むことができ、登場人物の心情や場面の状況、作者の表現の意図にまで考えを広げることができた。学習内容としては高度であるため、ほとんど考察に至らなかった生徒も見受けられるが、まずは古典学習において「頭を働かせて自分で考える」経験を持ったということが、今後につながると捉える。

また、授業の方法としては差異を見つける簡単な活動から入ることで、苦手意識を持つ生徒も取り組むことができ、グループワークによって考察内容がある程度のレベルに保たれた。グループワークや話し合い活動の形態をとることのできない学校での授業方法は今後の課題とするが、学習内容としては、生徒の学習レベルの高い学校であれば個人作業として比較・考察を行うことが可能であろう。

【課題】

実践の中で、電子辞書の現代語訳のみを確認する生徒の実態が捉えられた。物語内容への理解を深めたり、思考を広げたりするためには、原文の語感を確認することが重要である。古典学習の中で語句をその成り立ちから捉えさせることや、現代の言語感覚と照らし合わせること、紙媒体の辞書を用いることなどの有効性について生徒に実感させることが必要であろう。

また、実践者の授業技術の課題としては、特に「多様な解釈の可能性がある」という実感の持たせ方（意見の引き出し方、関連付け方、グループワークやワークシートの活用方法など）が挙げられる。

6、「『源氏物語』で教える」一原文を読む魅力

教育インターン中、「古文は外国語みたいで、何が書いてあるのか全くわからない」と言う生徒がいた。実践校では、古典の授業で生徒の話し合い活動や、視角教材

を取り入れるなど様々な工夫がなされているにもかかわらず、このような生徒が見られるのである。現代語訳に終始し、文法・語法など暗記中心の授業とあっては、古典を忌避する生徒がいかにも多く生み出されるか想像に容易い。

本稿で提案する本文比較の授業は、2種類の『源氏物語』本文を語句のレベルで比較するため、「原文で読む」ことを前提とした学習であり、学習としては高度であるが、比較という手段を用いて差異を見つけるという目的を持たせただけで、「原文を読む」というハードルが少なからず下がったと言える。また、前章【本文比較の流れと生徒の考察】で取り上げたように、「うつくしげ」と「うつくしき」の違いを捉える際、接尾語「げ」に関して着目する中で生徒は、「現代の言語感覚で古文(古語)を捉えることができる」経験を得たのである。

古典の授業における比較読みの学習には、同じ作品内の章段や巻同士の比較、他作品との比較などが挙げられるが、その扱い方によっては、現代語訳を比較対象としても得られる情報や学習効果がほとんど変わらない場合があると考えられる。一方、語句に着目させる本文比較は、現代語訳には反映されることのない、古文の巧みで繊細な表現を生徒に感じとらせることができる学習として捉えられるであろう。

また、長い年月の間多くの人々に読まれ、書き写され、残されてきた作品だからこそ、教材としてこのような学習を可能にさせた。「古典作品だからこそ成り立つ学習や得られる経験がある」という点を教員が自覚することで、古典教育がより柔軟かつ重層的に行われることにつながるのではないであろうか。古典教育の課題を踏まえると、教員の古典作品そのものに対する特別意識（文化的な価値／作品の難しさ／生徒が原文で理解することは難しいといった考え）が強く、教材としてどのように用いるかという観点が希薄になりがちであると考えられる。

本稿で紹介した実践は、教科書掲載の『源氏物語』「若紫」巻の中でもごく一部を扱ったものであることから分かるように、物語の全体像を捉えさせるような学習ではない。「たった1~2行程度比較しただけでも、複数の差異があり、またその差異によって様々な解釈が可能である」ことを実感させることを目的の一つとしている。ここでの生徒は、「物語内容を知る」のではなく、自分の力で原文を読み、考えを広げるという経験を持つ。『源

氏物語』を教える」のではなく、「『源氏物語』で教え、経験させる」ことを重視した授業として、異本を用いて『源氏物語』を教材化し、本文比較を行う学習を提案する。

おわりに

実践を踏まえ、本文比較の学習の中では「生徒にどれだけ古典の知識があるか」ということによらず、まずはどれだけ語句のニュアンスの違いを敏感に「感じ」とれるかということ、そしてその違いが何を意味するのかということについて、いかに自分の頭を働かせて「考え」られるか、ということが重要であると考えられる。

また、異本を用いた教材研究により、授業者側の作品理解の向上も期待できる。本稿で触れた教科書本文と挿絵の不一致の問題も、本文比較を行わずに教科書本文のみを扱う中ではおそらく気づくことのなかった点である。

以上のことから、異本を用いた本文比較の学習は昨今の古典教育の課題解決に向け、生徒の思考活動を中心とし、言語感覚を磨く学習の一つとして有効であると捉え、今後も研究を進めたい。

【注】

- (1) 現在使用されている教科書は、2013年検定済18点と2014年検定済1点の計19点であり、現時点で最新のものである。
- (2) 「平成17年度教育課程実施状況調査（高等学校）ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果」調査対象は国公立高等学校の第3学年、計29,801名。国立教育政策研究所2007 (<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kyouikukatei.html>)
- (3) 「解決学習で主体的な読みを可能にする、高等学校古典指導—「竹取物語」をめぐる対話を通して—」『東京学芸大学教職大学院年報』(3), 東京学芸大学教職大学院2015.3 (「東京学芸大学機関リポジトリ」<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>) 都内公立高等学校2年生640名(有効回答数593名)進学指導重点校、進学指導推進校、重点支援校等から8校を抽出。
- (4) 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(第2部)(国語、社会、地理歴史、公民)」文部科学省2016 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm)

htm)

- (5) 安野葵「大学生の古典力調査報告Ⅷ—平成27年度横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程1年次生の古典に関する関心度調査」『横浜国大言語教育研究』(42), 横浜国立大学言語教育研究会2017.3 (「横浜国立大学学術情報リポジトリ」<https://ynu.repo.nii.ac.jp/>) 本調査は第8回目にあたるが、回答の傾向については例年ほぼ同じである。
- (6) 木村順子「古典に親しみを持たせる授業の工夫—絵巻づくりを通して—」『国語教育—研究と実践—』(47), 千葉県高等学校教育研究会国語部会2010 (『高等学校国語科 授業実践報告集 古典編Ⅰ』明治書院2014年所収)
- (7) 阪本恵美子「挿絵を活用した古典の授業—『源氏物語』若紫巻「小柴垣のもと」の場面を中心に—」『愛媛国文研究』(60), 愛媛国語国文学会・愛媛県高等学校教育研究会国語部会2010 (『高等学校国語科授業実践報告集 古典編Ⅱ』明治書院2014年所収)
- (8) 杉木充「学年全体で行う「源氏物語の読み比べ」—古文、漫画、小説、現代語訳—」『平成24年度静岡県高等学校国語教育研究会会報』, 静岡県高等学校国語教育研究会2013 (所収は注7に同じ)
- (9) 石原直哉「現代語訳で読み味わう「源氏物語」」『日本語学』4月号, 明治書院2011
- (10) 注(9)に同じ
- (11) 斎藤菜穂子「源氏物語初音巻の冒頭を教材として—揺らぐ本文という知識—」『早実研究紀要』(38) 早稲田大学系属早稲田実業学校2004.3
- (12) 宗京少織「『平家物語』の異本を読み比べる」『研究紀要』(50), 東京都高等学校国語教育研究会2012 (所収は注7に同じ)
- (13) 授業に用いる本文は、『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』(伊井春樹編, 角川書店1999)より尾州家河内本を引用し、表記については教科書本文に対応するよう改めた。
- (14) 「動詞の連用形や形容詞語幹に接して、…の様子、…の気配、の意の名詞を構成し、また、「げなり」のかたちで、…の様子である、…らしく見える、の意の形容動詞を構成する。」(『CD-ROM 角川古語大辞典』角川学芸出版2002)
- (15) 宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『源氏物語』「桐壺」(三

条西実隆校 底本青表紙証本) (宮内庁「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」<http://toshoryo.kunaicho.go.jp/>)

- (16) 京都国立博物館蔵『源氏物語画帖』(土佐光吉 桃山期) 使用教科書(東京書籍『精選古典B 古文編』)には『源氏物語絵色紙帖』と記載。その他の掲載教科書は第一学習社『高等学校古典B 古文編』『高等学校古典B』、筑摩書房『古典B 古文編』、明治書院『精選古典B 古文編』『高等学校古典B』、教育出版『古典B 古文編』『新編古典B 言葉の世界へ』、東京書籍『新編古典B』、大修館『新編古典B』
- (17) 天理大学附属天理図書館蔵『源氏物語絵巻』(作者不詳 鎌倉後期) (『源氏物語 千年のかがやき』株式会社思文閣出版 2008)
- (18) 発表者が所有する電子辞書には「いかにもかわい

らしいようすである。いかにも美しい様子である。」との記載。(旺文社『全訳古語辞典』第三版, シャープ株式会社「edictionary」PW-A8300) 電子辞書は手軽に利用できるが、安直な現代語訳の情報だけに頼ると判断を誤ってしまうため、古典学習の際には注意が必要である。

本稿は、2017年5月28日第132回全国大学国語教育学会岩手大会(於 岩手大学)における口頭発表をもとに原稿化を行った。当日、会場において多くの方々から貴重なご意見をいただき感謝申し上げます。

また、教育インターンにご協力いただき、ご教授賜った受け入れ校の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。